



癒しの空間

「庭のある家を持ちたい」という長年の夢がかない、郊外の高台に小さいながら終の棲家を構えたのは平成6年の春だった。

わが家の

三方は道路に面しており、目隠しも兼ねて庭木を植えることを決めた。夫と私は庭造りの知識や技術がほとんどなかったが手探りで実のなる木や花を楽しむ木、草花などを配し、その一角に、盛り土をして家庭菜園も造った。

十数年の時間が流れ、古里から移し植えた三桧みつまはの幹の周囲は35センチに、金木犀は46センチに成長。新築祝に頂



桑野町 田中 榮子さん

いた木斛もくかくも見応えのある樹形になった。季節に応じて育てる野菜は食材として利用している。

庭の手入れは奥が深く、今でも「剪定の手引き」などの参考書が手放せない。それでも近くの竹林から、春になるとウグイス、初夏にはホトトギスの鳴き声が聞こえ、

作業時の大きな楽しみの一つとなつている。さらにいつの頃からか、庭には蛙や蟾螂かきりごし、蛇、昔トンボなどが、わがもの顔で棲みつくようになった。

このような雑然とした庭だが私にとっては居ながらにして四季の変化を感じられ、心の落ち着く癒しの空間になつている。

次は、福井町の小西晴美さんをお願いします。

市民文芸

短歌

阿南市文化祭
短歌大会作品

入選

多岐にわたり論じられる「鳴潮」を朝々に読む一番に読む

近藤 千代

入選

酷暑つづき地球のいたみ思いつつひと日の果ての夕顔ひとつ

徳川 明美

入選

亡夫が植えし梅の根元に詰りたる香炉の灰播き佇てりしばらく

勢井 恒子

入選

夜の厨罪を告白する如く水は紅茶をそそがれて泣く

吉永賀代子

入選

花の色失せて鎮もる父の墓午睡ならむか蝶遊ばせて

小畑 定弘

入選

鍋の中の浅蜷がひらきゆく瞬時何にか祈る息をひそめて

臣永 悦子

入選

葉の間陽あひだに鮮らけき蜘蛛の巣の処女女なるや艶やかな糸

棚野 久子

極月や矢印続く検査室

大西 裕子

まどろみてひざかけづらし美容院

中西 純枝

豆柿の撒かれたること空に彩

近藤 まい

木頭路は日裏日表柚子香る

岡本 隆子

極月の朝刊重きちらしかな

山川 喜美

店畳む店で賑はう年忘れ

田村 清朔

ひい孫の双子と歩む冬うらら

田中ゆり子

立冬やみかんハウスに煙立つ

山根 溪風

闘病と介護の日々や冬の雲

中川 治子

川柳

阿南川柳会
高木旬笑 選

食細くなつたと言うが三杯目

臣守 愛香

ローン済み心晴ればれ趣味の道

田上 鶴子

妻の茶に喉が一番馴染んでる

鈴木レイ子

洗いたい頭があつて街に出る

二階千代美

仲の良い家族もからむ洗濯機

武田 敏子

俳句

阿南市俳句連合会選

張本 雅宣

大根焚き笑顔も煮込み銚色に